

[ピラミッドからの話題]

攻めの防疫体制

櫻井 忠

(日本農産工業(株)畜産技術センター)

All about SWINE 61, 32-33

SPF豚農場の日本農産工業ピラミッドは長らくGGP/GP農場が1農場とCM農場が2農場で運営してきた。そのピラミッドに2019年度よりGP農場が1農場増えた。弊社とは別の飼料会社の直営農場で、事情により農場オールアウトを行って再始動した農場である。飼料販売では競合関係となるが、弊社ピラミッドとしてSPF豚の普及、豚業界の発展のために協力しながら尽力したい。

ピラミッドのCM農場で再びPRRSが侵入し、再度PRRSの清浄化に取り組み中である。2019年11月の侵入から3年弱でPRRS感染歴のない豚を出荷できる状況にまでこぎ着けているが、やはり前回の清浄化の経験が生きている。管理獣医師である筆者は、PRRSウイルスを「農場内に入れない」、「農場の中で増やさない」、「農場の外へ出さない」の農場防疫基本三原則を改めて農場に要請した。種豚群の免疫状態が安定化してPRRSウイルス非感染子豚が生産できるようになった後は、目に見えないPRRSウイルスを農場内で増やさないためにオールイン・オールアウト(AIAO)の徹底を求め、かつ監視している。前回の清浄化では6年間余りを要したが、今回はその半分の期間で清浄化の目途がついた。

AIAOは単に空の飼育室や豚舎の中へ豚群を入れることではない。AIAOでは清浄な豚群を入れ、その清浄性を維持しながら飼育し、清浄なまま飼育室や豚舎から豚群を出すことが重要である。また、出荷して空となった飼育室や豚舎の環境中の微生物を極力排除することも忘れてはならない。オールアウトして空室となった飼育室にPRRS感染歴のない豚群を導入した後の陽転を経験した際、スノコ裏側のPRRSウイルスの存在をPCRで確認した。このPRRSウイルスの生存性までは確認できなかったが、表面的に水洗、乾燥、消毒がなされた飼育室であってもスノコ裏側といった諸作業が十分行き届かない場所には病原体が残存する可能性のあることを痛感した。病原体の伝搬が完全に遮断できなければAIAOは本来の意味をなさないのである。

ここ数年来の養豚業界の疾病関連の話題は何とんでも2018年9月に岐阜県で発生した豚熱(CSF、旧名：豚コレラ)であろう。CSF発生農場は徐々に増えて2022年7月には83農場まで増えた。国内には優れたCSF生ワクチンがあるものの、野生イノシシによるCSFウイルス伝搬が背景にあるため、終息の兆しが見えてこないのが現状である。CSF発生が認められていない地

域は北海道、中国、四国および九州（沖縄を除く）だが、CSF 感染イノシシが見つかっていない地域は、イノシシが生息していない北海道を除けば 2022 年 8 月中旬時点で九州だけである。万一、九州地区で養豚場での CSF が発生すれば、養豚業に大きな影響をもたらすことが想像に難くない。

九州地区に GGP/GP 農場を有する弊社ピラミッドとしては、今後、農場防疫の正念場を迎えるかもしれない。農場防疫の破綻は農場の疾病発

生⇒亡益（注：亡益は筆者の造語）と負の連鎖が起きると考えられる。CSF 発生農場は発生から再開できるまで相当の資金と時間を要し、場合によっては事業継続が困難になる恐れもある。SPF 豚農場の認定規則や飼養衛生管理規準の遵守は攻めの防疫体制を求めていると筆者は捉えている。農場の疾病発生対策では、病原体を農場内に入れないことや農場の中で増やさない、言い換えれば攻めの農場防疫体制構築に注力した方がはるかに安価で取り組みやすいのではないだろうか。